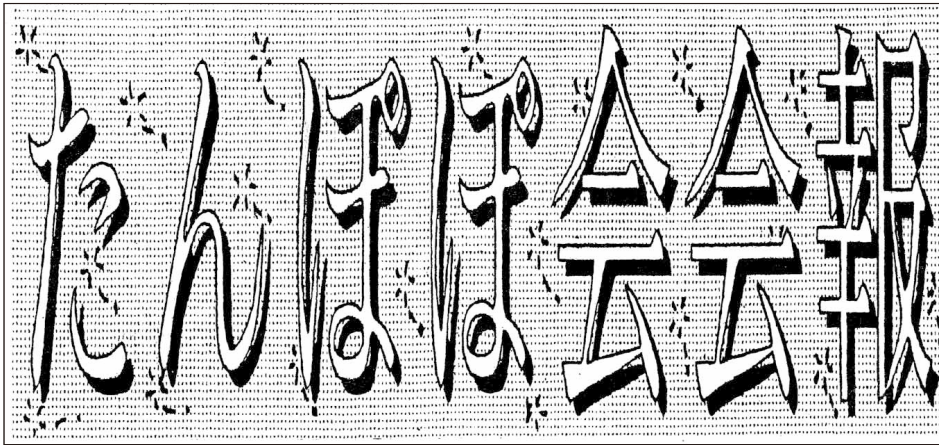




令和7年10月

発行者
たんぽぽ会
(東京学芸大学
幼稚園科同窓会)

〒184-8501
小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎
042(329)7813



『その人自身を見つめるつづいふ』

たんぽぽ会会長 田村 秀子

今年の夏は気温が40℃を超えた地域もあり、まさに酷暑でした。乳幼児を保育する園では、涼しく過ごせる環境づくりや氷・寒天を使った遊びなど様々な工夫をされたことと思います。また予想を超えた大雨で被災された地域の方々には、心よりお見舞い申し上げます。地球の温暖化がこれ以上進まないよう、一人一人ができることから始めていく必要があるように思います。

六月のたんぽぽ会総会、研修会では大勢の皆様にご参加いただき、議事をご承認いただいた後、造形活動を楽しみ、多くのことを学びました。久しぶりに手を使って真剣にモノと向き合い、若い方々の感性に刺激を受けて、心豊かな時間を過ごしました。

さて、私は四月から教員養成の仕事をしています。今時のおしゃれを楽しむ学生さんたちが一生懸命に指導案や論文を書いたり、緊張しながら模擬保育を行ったりする姿に触

れ、エールを送ってきました。

室内で遊ぶ指導案を書いてきた学生さんに「室内だと石鹸水が飛び散るから、シャボン玉で遊ぶ前の経験として、吹いて遊ぶ活動を考えたらどう？」と助言すると、新たに指導案を書き、準備してきました。シャボン玉の話してから紙のアオムシを取り出し、ストローで息を吹きかけると、アオムシがモコモコツと動きました。それを見て皆が「わぁ」と驚き、惹きつけられて、自分たちも教材を工夫し始めました。

今まで子どもや保護者と関わることの多かった私ですが、学生さんたちと関わり、一人一人の思いや変化を見つめることにも面白さを感じています。

そして、夏の全国幼児教育研究大会 滋賀大会で、大本山石山寺の座主 鷲尾 龍華 師の「目に見えないものを尊ぶ心」というご講演を伺い、人との関わりについて考えさせられました。情報が溢れる時代の

中で、見えないものを感じとり、尊ぶ心を忘れがちになっていないでしょうか。「その人自身を見つめる」という言葉を聞き、言葉だけで判断したりすぐ分かった気になったりしていたのではないかと反省しました。

「人の認識は人それぞれ。言葉のみで伝わるのは7%、あとの93%は非言語で、聴覚38%、視覚55%です」と伺い、声のトーンや表情で伝わるものが遥かに多いと知りました。人は本来、様々な感性を働かせ、相手の思いを感じとっているのでしょうか。以前、子どもの成長のために専門機関との連携を保護者に薦めたことがありました。話を伺う中で、専門機関に行くことに対して保護者なりの思いや不安があることが感じられたので、強くは薦めず、一年間、補助の先生の配置につながる申請をすることだけを提案し、提出は保護者に任せました。数日後に保護者は書類を申請し、丁寧な支援が幼児の成長と園への信頼につながり、小学校以降の支援にもつながっていききました。急がずに保護者の思いを尊重してよかったと感じた事例です。

様々な人と関わる中で、その人自身を見つめ、尊重するということが、これからも大切にしたいと思っています。

【大学より】

かわること、かわらぬこと

東京学芸大学附属幼稚園 園長 山田 有希子

(三十八回生)

附属幼稚園は、竹早園舎が二〇二四年に百二十周年を迎えました。小金井園舎は二〇二七年に七十周年を迎えます。たんぽぽ会みなさまには、それぞれに附属幼稚園の思い出があると思いますが、当然のことながら、両園舎とも少しずつ変化しています。

近年のトピックを二つ。

一つは、両園舎の樹木についてです。両園舎とも豊かな樹木に恵まれています。コロナ禍前くらいに、歳を重ねた樹木のいくつかは、倒木の危険という診断を受けました。竹早園舎ではシンボルツリーであるタイサンボクやクスノキが伐採され、小金井園舎では桜・アンズ・コナラの木が伐採されました。大きな木々

が伐採されると景色が変わり、残念な気持ちではありますが、竹早園舎のクスノキは、その一部が演台と各室の表示に作り替えられ、園舎が素敵な香りに包まれました。両園舎とも、まだまだ、緑豊かと言える環境にあり落ち葉掃きが欠かせない日々です。



小金井園舎
2017年60周年



竹早園舎
2024年120周年

もう一つは、今年度より、今まで大学教員が兼務していた園長が専任となりました。竹早園舎はずいぶん前から竹早小学校と兼務の園舎長と副園長がおり、小金井園舎には副園長がいます。歴代の園長先生方は、ご専門を問わず、みなさんとても幼児教育と幼稚園に理解があり、力強く支えていただけてきましたし、ご専門が違うからこそその視点もたくさん学ぶことができました。今後も大学とのつながりを大切にしながら、子どもたち・保護者のみならず、学生たちにとっても大切な幼稚園でありたいと思っています。他学科を含め大学授業等での来園は年々増えています。そして、特に大学幼児教育教室とは、変わらず密接につながっています。数年前より、幼児教育教室と協力して大学オープンキャンパスの際に幼稚園公開を行っています。当初は、ひっそりと施設見学のみを行っていたのですが、徐々に大学全体案内にも掲載されるようになり、昨年度からは「幼稚園教員の魅力を

語る会」として、両園舎の先生たちが十五〜二十分程度、語る企画を行っています。一日で全八回、今年も酷暑の日でしたが、百名を超える方が来園しました。

大学も幼稚園も、変わりながらも変わらずです。たんぽぽ会みなさまも、機会がありましたらぜひ、変わった？ 変わらない？ 幼稚園にどうぞいらしてください。



幼児教育コース
Web サイト
二次元コード



令和7年度 たんぽぽ会 総会・研修会

『わくわく新聞工作』
～ゼロから立体を作る～

カリタス学園小学校図工科教諭
アートセラピー講師
加藤 蘭里 先生

夏の訪れを知らせるかのような日差しが降り注ぐ令和7年6月21日（土）に、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎にて令和7年度たんぽぽ会総会及び研修会が開催されました。

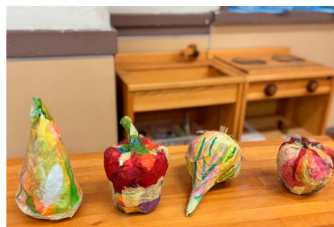
総会には、ご来賓として、一般社団法人東京学芸大学同窓会理事長 茅原直樹様にお越しいただきました。また、東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎より園長山田有希子様、同副園長山崎奈美様にもご参会いただきました。

総会では、令和6年度の事業及び会計報告、令和7年度の役員、事業計画案・会計予算案が全て承認されましたことをご報告いたします。



（総会の様子）

総会後、会場を遊戯室へと移し、研修会を行いました。今回はカリタス学園図工専科教諭の加藤蘭里先生をお招きし、「わくわく新聞工作～ゼロから立体を作る～」と題して新聞紙を使ったワークショップをしていただきました。遊戯室にはわくわくするような様々な材料や絵の具、講師の先生の作品が並び、参加者の期待が膨らんでいました。



新聞紙で作られた野菜や果物
（加藤先生の作品）

まず、新聞紙を丸めたりちぎったりして、思い思いの形を作ります。そこに水で溶いた糊で和紙を重ねて貼っていきしました。乾かしてから絵の具で色付けしてもよいし、和紙自体に絵の具を塗ったり、はじき絵をしたものをちぎって貼ったりしてもすてきになることを教えていただきました。

また、「幼児教育から小学校教育へのつながり」図工専科の実践を通して「～」というテーマでお話もしていただきました。「ゼロから立体を作り上げることは子どもたちにとって空間認知能力を高めることにつながる」そうです。他にも、日常生活の基礎となる体全体を使った大きな動き（粗大運動）と手先を使った細かな動き（微細運動）の積み重ねが大切であること、自由に取り組めるテーマにすること

で伸び伸びとした表現を楽しむ姿につながるなどをお話いただきました。

ワークショップを通して、日頃子どもたちが感じている楽しさを味わったり、素材・用具の特性を知ったりす

るなど、様々な学びを得ることができました。



（ワークショップの様子）

当日の様子や参加者の作品などの写真をたんぽぽ会HPにて紹介しています。ぜひご覧ください。

次年度の研修会も充実したものになるよう、準備を進めてまいります。「こんなことを学びたい」「この方を選んでほしい」などのご意見がありましたら、たんぽぽ会のHPお問い合わせ欄やGメールアドレスまでご連絡ください。

< 特集 >

**学芸大
幼稚園科
卒業生の
活躍**

ますます大事にしたいこと

二十六回生

聖心女子大学名誉教授

河邊 貴子

半世紀！

今年三月で聖心女子大学を定年退職しました。幼稚園科に入學したのが18歳ですから、50年もの間、幼児教育の世界に浸ってきたことになりました。50年、つまり半世紀！歴史の中でしか出合わないようなワードの響きに驚かされます。体感としては「一瞬」なのですが。

高校二年生の秋、家庭科の「保育」という単元で、出身園を訪問するという課題が出ました。私自身は幼稚園に馴染めない幼児でしたので、園訪問は気が重かったの

ですが仕方がありません。ところが見学してみたら子どもの様子が強烈に面白く、私はその日の体験がきっかけとなって、それまで目指していた高校体育教師から幼稚園教師に進路変更したのでした。

以下はそのときに書いた「幼稚園を見学して」というレポートの最後のまとめです。

見学しながら逐次気が付いたところを書きだしてきたが、たった一日の見学で感じたことが多すぎて書ききれない。(中略)「同じ年でもいろいろ差があること」「五歳児と四歳児とはものすごい肉体面、精神面に差があること」ということは、ちょうど四歳から六歳というのは両面において成長が著しいのであろう。こういう時期に幼稚園で正しい教育を受けさせるというのは大事なことだと思う。(中略)私も大勢の子どもと一緒に遊び、そのような子どもを正しく導いていく先生になりたい

と痛烈に思った。

この偉そうな感想が、私のキャリアの起点です。「幼児期における・正・当・な・教・育・と・は・何・だ・ら・う」「正しく導くという関係性は違うのではないか」というようなことを問い続け、迷い続け、半世紀もの間、幼児教育の沼にはまっています。好きな道に出会え、その道を歩き続けられてきた。なんと幸せなことでしょう。

幸運な出会い

当時、国立大学は一期校と二期校に分かれていて、優秀な人は一期校へ。私は一期校不合格で学大に進学しましたが、それが幸運でした。幼稚園科には幼児体育の第一人者だった近藤充夫先生がおられたからです。なにせ体育教師になりたかったくらいですから身体活動について関心があり、先生に出会うためにここに入學したと思えました。幼児の心と身体の発達についての近藤先生の授業は面白

くて仕方がありませんでした。今でも当時のノートを大事に保管しています。卒論と修論を近藤先生にご指導いただきました。

そしてもう一つの幸運が、小川博久先生との出会いです。先生の熱風のような遊び保育論を浴びて、私の保育観の基礎は築かれました。博論の指導は小川先生です。

というわけで結婚式の主賓は通常両家一名ずつですが、私の場合はお二人が並んで主賓。それほど大きな存在のお二人でした。お二人ともすでに鬼籍に入られました。当時の学びが自分の核になっていることは間違いない。大学教員としての在り方のモデルでもありました。

お二人からの学びが多すぎて、この紙幅で全部挙げることはできませんが、保育について強いてまとめるならば、次の三点です。

・子どもは生まれながらに有能で能動的。大人は「教える」というベクトルで接するのではなく、まず子ども自身が何をどうしよ

うとしているかを、しっかりと観察すること

・子どもは遊びという主体的活動の中で試行錯誤しながら自己実現を図ろうとしている。教育とは彼らの自己形成を支えることであり、幼児教育において子ども理解は重要で、理解の延長上に援助の可能性を見出すこと

・援助に当たっては、人、モノ、コトと子どもとの双方向的な関係を理解し、環境の構成・再構成を考えつづけること

保育現場に直接携わっていたときも、大学で保育者を目指す学生の指導にあたる時も、そして園内研究などで現場の先生方と学び合うときも、これらが私の思考の原点となっています。

社会の変化にどう対応するか

私のキャリアのスタートは文京区の公立幼稚園教諭です。その頃は子どもがたくさんいて、一学級40名定員。満杯でした。それが今はどの幼稚園も園児数の減少で存続の危機

に直面しています。共働き家庭の増加、少子化、幼児教育無償化等の要因が複雑に影響しています。社会的には保育サービスという名のもとの多機能化が求められているのですが、特に、国公立園は園独自の裁量権が小さいために容易に柔軟な対応ができないでいるのです。

一方で、わが国の保育行政は、待機児童対策のための乳幼児施設の量的確保の時代を経て、近年、保育の質に焦点を当てるようになりました。遊びを中心とした質の高い保育が、今まさに求められています。にもかかわらず、国公立園のように遊び保育を長年にわたって展開し、ノウハウを蓄積してきた園に園児が集まらない。こんな事態が続いたら、幼児教育全体の質の低下を招くことは必至です。

私が学生時代に学んだ前述の考え方は、半世紀たっても色褪せるものではありません。いやむしろ、子どもの生活体験が乏しくなった今、子どもに遊ぶ時間・空間・環境をたっぷり用意することはますます重要で

しょう。遊びの中で自己決定し、環境に自ら関わり、他者と協同して遊びを面白くしていくために試行錯誤していく体験は、骨太の子どもを育てるためにますます必要です。

遊びの大切さの発信を

ではどうしたらよいか。私には正解が分かりません。けれども質の高い保育の実践を地域社会に発信し続けなければならないことは確かです。遊びを中心とした保育とは、主体性尊重という名の下で遊びを「放任」する保育でもなければ、逆に「教えなければ子どもは学ばない」と考えて、保育者が一方的に構想する保育でもありません。子どもの遊ぶ姿を理解し、そこから発達や学習の道筋をみとり、次の生活や遊びをデザインする保育です。そこに幼児教育の独自性や面白み、醍醐味があるので

す。

現在、私は園内研究会の参与など、現場支援に軸足を置いています。学大附属幼稚園小金井園舎の園内研にも長いこと関わらせていただいてい

ます。附属幼稚園の子どもたちは実によく遊びます。それは附属の先生方が的確に子どもを理解し、周到に環境を構成するからで、全国の保育の灯台となりえるものです。現在、この素晴らしい実践を書籍化しようと先生方と計画しています。刊行を楽しみにお待ちください。

最後に。七月末に全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会の東京大会が開催されました。準備に当たられた都の園長先生方の中に、たくさんのおたんぽぽ会会員の顔がありましたし、多くの後輩が会場で学んでいました。頼もしく思いました。私たちが学生時代に学んだ保育の理念や原理は確かなものです。たんぽぽ会会員の皆様、日本の子どもたちの幸福のために、どうかよき実践を展開し、発信し続けてください。

私ももう少し頑張ります。

*令和6年度末に聖心女子大学を退官された河邊貴子先生に寄稿いただきました。

各期のたより

仲間とのつながり

四十七回生 小城 千瀬

四十七回生の仲間ほぼ全員と会えたのは八年前でした。同期の一人が結婚することになり、東京に遊びに来ると聞き、皆でサプライズを企画しました。それぞれができることを活かして準備を進めていると、学生時代にも皆で企画をしたことを思い出しました。それぞれ環境も変わり、長い間会えていなくても、あつという間に昔に戻ったようでした。学生時代に自分の居場所があり、時が経ってもなお仲間でいられることはとても幸せなことだと感じます。

私は今、幼保小の養成校に勤めています。私自身が学生時代に仲間や先輩・後輩、先生方に恵まれ今があるため、学生さんも充実した学生生活を送れるとよいなと願いつつ日々仕事をしています。幼稚園科の縦横のつながりは、実はすごいことだったのだと今感じます。また皆さんと会えることを楽しみにしています。

もうすぐ出会って20年

五十七回生 松田 陽

私たちの代は、結婚・出産が比較的早く、子育てなどで環境が変わり、卒業後の就職先を離れた仲間も多くいますが、幼稚園教諭や保育士としてだけでなく、子育て、自主保育の運営、家事代行業など、現在もそれぞれの場所で、子どもと関わりながら過ごしているようです。その間、私自身も保育に悩んだり、転職が頭をよぎったりしたことも……。でも、ありがたいことに、園内研や区幼研などを通して、たくさんの方先生方にご指導いただく機会があり、子どもたちに対する新たな視点や、違った角度からの保育の考え方に会った中で「やっぱり保育って面白い！」と思ひ直し、今も保育に携わっています。

入学して20年になる来年は、久しぶりにみんなで集まろう！と話しています。会うとあつという間に科室で過ごしていたころに戻る仲間との再会が今からとても楽しみです！

たんぽぽ会のホームページに情報を載せています！

研修会の情報やたんぽぽ会からのお知らせを随時更新しています。
ぜひご覧ください。



<たんぽぽ会のメーリングリストにご登録ください！>

研修案内や総会資料など、たんぽぽ会からの情報が届きます。下記のメールアドレスまでお名前と何回生か(または卒業した年)を添えてメールをお送りください。

tampopokai.tgu@gmail.com

<会費納入のお願い!!>

たんぽぽ会の運営維持のため、会費のお振り込みをお願いします。12月末日までにお振り込みください。

会 費 2,000円

振込先 三菱UFJ銀行 小金井支店

普通口座：0427768

口座名：東京学芸大学幼稚園科同窓会

会長 田村 秀子

※ 振込人に何回生かの数字とお名前を入れてください。

《インフォメーション》

★令和8年度 たんぽぽ会総会・懇親会

令和8年6月20日(土) 予定

東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎にて

★令和7年度卒業論文発表会

令和8年1月31日(土) 9:00～

開催方法は未定 東京学芸大学にて

令和7年度 たんぽぽ会役員

会 長 田 村 秀 子(29回生)

副会長 小 澤 明 子(30回生)

青 山 伸 子(36回生)

庶 務

研 修 女 屋 旬 子(36回生)

小 池 友 美(43回生)

大 川 美 紀 子(44回生)

澤 田 亮(51回生)

会 報 川 崎 暁 子(46回生)

山 本 遼(60回生)

事務局 八 木 亜 弥 子(48回生)

会 計 宮 崎 智 恵 子(58回生)

増 子 梨 央(66回生)

会計監査 東京学芸大学附属幼稚園

園長・副園長

監 事 井 口 美 恵 子(21回生)

永 井 由 利 子(21回生)